

照葉樹林だより

綾の森を世界遺産にする会 会報

第2号

2006年1月20日

「綾の森」の物語

綾の森を世界遺産にする会副代表 郷田美紀子

— 照葉樹の森に向かうと、いつもある光景が思い出されます。2002年春、私たちの手で再開したシンポジウムに参加いただくため、佐々木高明^(註)先生が再び綾を訪れて下さった時のことです。父郷田實がはじめた「照葉樹林文化シンポジウム」(綾町主催)の第1回基調講演から、実に17年ぶりのことでした。先生は森にかけられたつり橋のまん中に立たれ、深々とお辞儀をされて、「よくぞ残してくださった。よくぞ残してくださった」と幾度も幾度もつぶやかれました。若葉が光り、まるでブロッコリーのようにもくもくと繁る5月の森の上を、綾の森の象徴といわれるクマタカが、ゆっくり大きく円を描いて飛んでいました。—
『結いの心』増補版、郷田實・郷田美紀子著

(注) 国立民族学博物館名誉教授・照葉樹林文化研究の第一人者

綾の森を歩くと、森から様々の物語をきくことができます。その時、私の心に浮かぶのは「紆余曲折」という言葉です。今から40年前のこと、町内の国有林(自然林)の伐採事業計画に対し、小さな自治体の長として、父郷田實は必死の反対運動を行い、多くの力添えを得て、その年の伐採は免れました。

その後も執拗に伐採を迫られ、それに抵抗する策として1967年国定公園指定への運動を始めました。しかし綾の知名度もなく、雑木林より換金性の高い杉を重宝する時代でしたし、自然とか環境への認識も低く、ましてや照葉樹林という言葉も知られていない頃ですから、この運動は不可能に近いことでした。しかし、綾の熱意に心を動か



された当時の熊本県知事をはじめとする多くの方の協力で、やっと、九州中央山地国定公園として指定を受けたのは15年後の1982年のことでした。これより完成は2年遅れましたが、この運動のあとおしとして作られたのが照葉大吊橋です。「この橋は山の自然を味わってもらうための架け橋。自然の恵みとか、自然の生態系の素晴らしさを肌で感じてもらい自然を大切に守ろうという気運を盛り上げるためのものです」と、生前父は語っていました。国定公園指定は、当初、須木村を含めて9,000haで申請したのが最終的には3,000haにまで減らされてしまいました。それでも困難だっただけに喜びはひとしおだったに違いありません。その後、緑の国勢調査で照葉樹林の残存面積は日本一という折り紙がつけられ、綾の森は、その山

を守ったという綾の物語と共に、多くの人々に愛され、親しまれるようになりました。

そして時はめぐり、再び訪れた森の危機。九州電力の巨大送電鉄塔建設という大きな問題。それを阻止するためにおこしてきた世界遺産運動。結果はどれも徒労のように思えたこともありました。しかし現在、営林局から

名を改めた九州森林管理局、宮崎県、綾町、日本自然保護協会、そして私たち市民とが力を合わせ10,000haの森の自然林復帰をめざして、100年がかりの『綾の照葉樹林プロジェクト』が始まりました。森の物語はこれからも続いていきます。そして綾の森は、森を守る為に動いた多くの人のことを、いつまでも忘れないでしょう。

きょうも森はサワサワとゆれています。

海と風の恵み ー世界の照葉樹林ー

緑の照葉樹林プロジェクト検討委員会 委員 大澤 雅彦

世界の陸地面積の3分の1は森林です。その半分以上は常緑樹の熱帯林が占めています。熱帯多雨林から連続して分布する常緑樹林の北限にあたる照葉樹林は生育期間に十分な降雨がある温帯に発達します。日本では冬の月平均気温が -1°C になる仙台付近が北限になります。世界の照葉樹林の分布をよく見るといずれも南北両半球の緯度30度付近に分布しています(図1)。しかも東アジア、北米東南部、ブラジルのリオデジャネイロ周辺、オーストラリアの海岸山脈など多くの森林は大陸の東側にあります。これは地球が右回転しているので中緯度(緯度30度付近)では貿易風と呼ばれる東風が吹き、海からの湿った風を直接受ける大陸東側に多雨林ができるためです。

さらに東アジアではこの多雨林の範囲が他地域に比べるとずっと広く、日本から中国南部、さらに細い帯となってヒマラヤ山腹を西へ延びています。これは貿易風のせいというより、巨大なユーラシア大陸と太平洋との温度差によって季節的方向を変えるモンスーンが吹く地域で、最も広い多雨林になっています。

いつでも葉をつける常緑樹林が分布するという事は、植物にとっては好適な環境と言えますから、長江流域など照葉樹林が広がるこの地域では早くから農業が発達し、最近の研究によると紀元前6,000年頃にはすでに農耕が始まっていた。世界四大文明のうちで現代に至るまで絶えることなく連続と続いているのは中国文明のみです。照葉樹林の領域がいかに肥沃で植物にとって好適な

環境となり、豊かな文化を築いてきたかがよくわかります。こうして時代を通じて蓄積されてきた農耕文化が中尾佐助によって照葉樹林文化と名づけられたのです。日本の基層をなす照葉樹林文化は時間軸上では縄文文化に対応させられ、上山春平編『照葉樹林文化』(1969)はこの文化のルーツ探しを主題としています。

照葉樹林の普遍文化

最近、学生実習で椎葉村を訪問しました。その折に、椎葉村の中竹和蔵さんに焼畑についてご教示いただきました。焼畑ではイノシシの害が深刻です。作物を植えたときには髪の毛を焼いて竹串に付けて畑の周りに立て、その異臭で動物の侵入を防ぐという話を聞きました。柳田國男の処女作『後狩詞記』(1909)ではヤエジメと呼ぶと記述があります。ブータンの留学生にその話をすると「それはブータンでもやっているよ」というので、照葉樹林文化はこんなところでもつながっているのかと感心しました。ところが、これは後日談ですが、ハーバード大学の著名な熱帯生態学者のピーター・アシュトン教授に会ったときにその話をすると、なんとイギリスの彼の故郷でもやっているというので、またびっくりです。人間の知恵や文化なんてそんなものかなとも思います。人類は誕生のときから地球上を移動し、何らかの情報交換をしていたはずですが、普遍文明と民族文化と言いますが、これは普遍文化です。氷河期に人類が北方から南下して、それが言葉に証拠として残っていることについて気候地理学者の鈴木秀夫『気候の変化が言葉をかえた』(1990)が論じていますが、インドーヨーロッパ語族というのはまさにそのとおり、氷河期に人々がアイスランドからインドまで移動したから言語に共通性があるというのです。これほど移動能力があれば文化の伝播が普遍的であるのも頷けます。

普遍文化といえば、照葉樹林域ではお茶もそうです。照葉樹林が点々と残るところはお茶の産地です。日本、中国はもちろんですが、19世紀にアッサムの照葉樹林で自生のチャノキが発見されてから一気に栽培が広がり、ここ200年足らずの間に世界中の適地、すなわち照葉樹林の領域で栽培されるようになりました。トルコやコーカサスの南側グルジャ共和国の黒海沿岸は、ソ連時代には

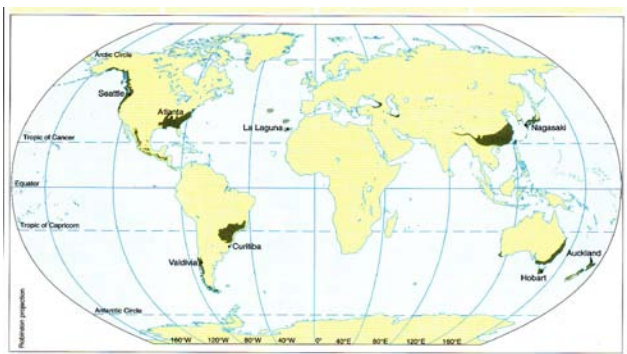


図1 世界の照葉樹林。緑の部分が温帯多雨林。北半球は東から日本、中国、グルジャ、カナリア諸島、北米東南、南半球はニュージーランド、オーストラリア海岸山脈、ブラジルアトランティック多雨林、ヴァルデピア(ミシオネス)。

(世界生物圏百科第6巻温帯多雨林より引用)

領土で唯一の亜熱帯として宣伝されました。もちろん、このチャノキは自生ではなく1895年、当時のロシア皇帝の命を受けたクラスノフらが日本から持っていったものです。それでも導入すれば、気候的にはチャノキが十分育つ条件で、同時に導入したスギが防風樹とし茶畑を取り囲んでいます。内戦直後に訪問したときは、すっかり雑草のワラビに覆われてしまいひどい有様でした。また、日本から導入したクズやシラカシもよく育ち、あちこちに侵入する雑草木として厄介者になっています。インドネシアのお茶も、初めは日本から導入したものです。南半球では、ブラジルのパラナ盆地でマテ茶をご馳走になりました。これはエルバ・マテ (*Ilex paraguaiensis*) というモチノキ科の常緑低木の葉を使うものです。南米の照葉樹林に相当するミシオネス林や周辺のパラナマツ林の下層に生えるエルバ・マテの葉に覚醒作用があり、それから栽培が広がったのです。

なぜか照葉樹林地域には美味しいワインがあります。綾にもさっぱりしたおいしい綾ワインがあります。もう5年ほど前になりますが、アフリカの西にあるスペイン領のカナリア諸島で、第三紀のヨーロッパ大陸に広く分布していた遺存型照葉樹林(ローレル林とよぶ)を2年間にわたって調査しました。テネリフェ島には「VINATIGO(スペイン語でタブノキ)」という銘柄のワインがあります。フルーティな白ワインで、これを周辺の海でとれるマグロをフグのように薄切りしたカルパッチョと一緒に味わったときの感激はいまでも忘れません。コーカサスの南グルジャ共和国のコルヒス地域も西のカナリア諸島と同様ヨーロッパで常緑樹が生き残った地域ですが、ワインの大産地で、収穫期には道端で搾りたてのブドウジュースが大繁盛です。ワインもおいしいものが沢山あり、ブドウはグルジャのシンボルツリーです。南米ではチリに「ミシオネス」というワインがあります。しかし、ワインは、本来は照葉樹林と対比される大陸西岸の地中海気候地域が適地ですが、温度気候的に同一の照葉樹林地域では、栽培適地を注意深く選べば、同じように良質のワインが作れるでしょう。

縄文時代にも人類は世界中を移動し、たかだか20,000年ほどの間に世界中に広がりました。人が移動し、文化を伝え、それぞれを育む土壌があるところでは、根付いて独特の文化へと発展していくものです。文化の共通性を言う場合は、時間軸が重要です。人類はその文化圏を広げ続けてきましたが、さまざまな人々の知恵が凝集して一つの文化と呼べるような形をとるまで数百～数千年か

かったとしても、たとえば一大陸の全体にわたってある文化が伝播する速さは、先史時代でも、文化の形成とあまり変わらない時間のようです。かつて氷河期にベーリング海峡をつないでいた陸橋ベーリングアを通過して新大陸に渡った人類が、南米の南端まで達するのに1,000年ほどかかっていますが、文化の伝播はもっと早いはずですが、

照葉樹林復元に向けて

ところで、綾の照葉樹林は、国内でも最大面積の照葉樹林が残存しているところとして世界自然遺産の最後の候補まで残りました。宮崎平野周辺部は、上野登『再生・照葉樹林回廊』(2004)で提案されている照葉樹林ネットワーク構想を、いまだに現実味をもって語れるだけの残存林が分布する貴重な地域です。とくに猪八重、高房台などの照葉樹林は、日本で最後の低地型温帯多雨林であり、世界的にみても極めて貴重です。前述のカナリア諸島ラゴメラ島のガラホナイは綾と同じような照葉樹林そのものが世界遺産になっています(写真)。ほぼ屋久島と同じ北緯30度にあり、島の山頂部4,000ヘクタールが世界遺産です。ヨーロッパでは氷河期に絶滅してしまった貴重な森林



ラゴメラ島ガラホナイの世界遺産地域

を今に残している遺存型照葉樹林として1986年に登録されました。

日本では、もともとあった照葉樹林は、わずか3%しか残っていません。肥沃で農耕に適した照葉樹林の領域は、世界的にみても残存率が低く、ブラジルのアトランティック多雨林はすでに5%以下、カナリア諸島でも雲霧林のうち残っているのはわずかです。綾の照葉樹林の復元は、世界的に見ても先進的プロジェクトです。人為による遺存型森林にならないよう復元の成果に期待したいと思います。

(東京大学大学院教授、日本自然保護協会専務理事)

「てるはの森の会」事務局から

「綾の照葉樹林プロジェクト」の動き

～普及・啓発活動～

■プロジェクト説明会の開催(2005年10月25日)
プロジェクトへの幅広い参加・協力を募るために、プロジェクト説明会を宮崎市民プラザで開催しました(参加者数：企業・団体・一般など約70名)。九州森林管理局から保護・復元方法に関する説明、事務局からプロジェクトへの参加方法の説明を行ない、質疑応答では今後のプロジェクトの進め方や地元との連携についてなど、たくさんの質問・意見を頂きました。今後もこのような説明会を各地で開催し、プロジェクトへの理解を広めていく予定です。

■綾工芸祭りへの参加(2005年11月18日～20日)
綾町のてるはドームで開催された工芸祭りに参加し、プロジェクトを紹介するパネル展示やリーフレット配布、関連書籍の販売を行いました。

スタートしたばかりの「綾の照葉樹林プロジェクト」にとって、このような普及・啓発活動は、今後事業を円滑に進めていくためにとても大切なものです。大がかりなものだけでなく、身近な方にちょっと紹介する、そんなことがプロジェクトにとって大きな力となります。皆さまのご協力をどうぞよろしくお願いいたします！

～会議の開催～

■検討委員会の開催(2005年12月2日)
第3回検討委員会が綾町役場で開催され、保護林および緑の回廊の設定、人工林エリアの照葉樹林復元に関する基本的枠組みについて最終討議が行われました。

■連携会議の開催(2005年12月2日)
第2回連携会議は綾町役場で開催され、第3回検討委員会での検討結果を踏まえ、保護林および緑の回廊の設定、人工林エリアの照葉樹林への復元に関する基本的な枠組みが提案され、承認されました。また、普及啓発事業(リーフレットの作成)、サポーター会員の募集状況、環境教育事業(綾の沢調査など)の実施状況についての報告と、今後の環境教育の進め方が検討されました。



マンリョウ

♪ お知らせ ♪

筑紫哲也氏講演会

「多事争論～照葉樹林をめぐる～」
(2006年2月5日 13:00 綾町公民館文化ホール)

TBS テレビ「NEWS23」でお馴染みの筑紫哲也さんをお招きし、プロジェクトの発足記念講演会を開催します。綾の照葉樹林については番組でも特集され、「私の一番好きな自然のひとつ」として世界遺産登録運動にも賛同されています。多くの方のご来場をお待ちしています！

※参加申込方法

定員700名・先着順ですので、まずは電話で事務局へお問い合わせの上、往復ハガキに住所・氏名・電話番号を明記の上、てるはの森の会事務局「講演会係」宛にお申込ください。ハガキ1枚につき2名様までの応募となります。2名様とも必ずご氏名を明記してください。

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000円
	家族サポート会員	3000円
	団体サポート会員 一口	5000円
	法人サポート会員 一口	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は下記事務局までお気軽にお問合せください。

綾の森を世界遺産にする会 会報
第2号 2006年1月20日
発行：綾の森を世界遺産にする会
事務局：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき
NPOハウス403号
TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: http://www.teruhanomori.com

(表紙の写真「05.12.22 綾の森冠雪」 撮影 坂元守雄)
(4ページのイラスト「マンリョウ」 阿部ハツエ)